

氏名 ペルトネン <sup>ジュンコ</sup> 純子  
 学位の種類 博士 (美術)  
 学位記番号 博美第263号  
 学位授与年月日 平成21年3月25日  
 学位論文等題目 〈作品〉土と天のあいだ—銅鍛金蕃蕪文花器 I・II・IV—  
 〈論文〉模刻教育の意味について  
 —東京芸術大学鍛金教育の歴史を通して—

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授 (美術学部)	本郷 寛
(論文第1副査)	〃	准教授 ( 〃 )	小松 佳代子
(作品第1副査)	〃	教授 ( 〃 )	篠原 行雄
(副査)	〃	〃 ( 〃 )	木津 文哉
( 〃 )	〃	名誉教授	上野 浩道
( 〃 )	〃	名誉教授	竹内 順一
( 〃 )	富山大学	教授	中村 滝雄

(論文内容の要旨)

本論文は、自らの制作の根本的位置にあると考える模刻による鍛金教育を取り上げ、模倣との比較、東京芸術大学の鍛金教育の歴史、さらに筆者の体験に基づいた模刻教育から、模刻教育の実際の指導過程を検討するものである。模刻教育は、特に立体として形を捉える力を養うのにすぐれた方法であるが、先行研究においては模刻による鍛金教育の指導過程にまで踏み込んで検討したものはない。本論文は、模刻教育の内実に迫り、この教育方法の今日的意味を明らかにすることを目的としたものである。

第1章では、模刻教育とは何かを定義づけるために、金鋸づくりと、絞り技法における模刻による教育とを手がかりに、模刻教育を成り立たせている諸側面を明らかにした。筆者が東京芸術大学で体験した模刻教育では、学習の最初に金鋸づくりを学ぶ。金鋸づくりは、見本の通りにつくり、制作者の身体と一体化することができるような使いやすしい道具をつくるのが目的であった。この金鋸づくりの工程そのものは、厳密には模刻とは言えないが、作品制作に生かされる技法習得の過程も含まれている。さらに、模刻による絞り技法の習得過程に見られるように、模刻教育とは、技法習得だけでなく制作者の表現へとつながっていくものである。また、江戸期から昭和初期の教育における模倣と比較することで、筆者の考える模刻教育の特徴を明確化することを目指した。その結果、模刻教育は、江戸期の手習塾に見られる「滲み込み型」モデルと多くの共通点を持つもので、目標とすべき見本が身近な環境にあること、指導者の実演を模倣して身体によって技法を習得していくことなどの特徴をもつことを見いだした。

第2章では、東京美術学校とその後身である東京芸術大学の鍛金教育の歴史的な変遷を追い、鍛金教育における模刻の位置付けについて考察した。東京美術学校では、金属加工技術段階で分けられていた金工技法を、鍛金、鋳金、彫金の三技法に分けて作家養成に取り組んだ。鍛金技法分野においては、主に絞り技法を中心に伝統的技法を模刻によって習得させていた。東京美術学校時代の模刻教育に用いられた見本と、その見本をもとに制作したといわれる作品は、現在も残されている。当初筆者は、模刻によって制作された作品は課題作品で、卒業制作は模刻ではなく学習者の創作意欲に基づいた作品であると考えていた。しかし東京美術学校では、模刻によって制作された作品を卒業制作として認めていたと考えられる作品があり、改めて東京美術学校における模刻教育の位置付けを考え直す必要がでてきた。

東京美術学校の鍛金家教員、平田宗幸に始まる絞り技法の教育、特に一枚の金属板からつくられる技法は、主に模刻によって指導されていた。これを引き続き深く追求したのが、石田英一であった。石田によってさらに深められた一枚の金属板からつくられる絞り技法は、その技法によって到達できる表現領域を示したといえるほどの名人技である。そして、石田によって模刻による制作として指導され始めた絞り技法に見られるような東京美術学校の模刻教育は、高度な伝統的鍛金技法の習得や伝承と同時に表現をも学ばせるものであり、技法から表現へと進ませるものであった。しかし、石田の後に続く者は、絞り技法表現をそのまま受け継ぐことよりも、新たな展開を模索し始めた。さらに、産業界の発展の影響によって、模刻を中心に置いた鍛金教育は退けられることになった。こうして東京芸術大学の鍛金教育は、模刻によって伝承される伝統的鍛金技法の習得や一枚の金属板から始まる表現を重視した教育から脱皮して、鍛金技法の新たな方向性を見出すようになったのである。

第3章では、筆者が東京芸術大学で受けた教育とその後の筆者の制作作品を取り上げ、模刻教育が制作者としての筆者に何をもたらしたのかについて考察した。筆者は「鍛金法順序手本」の一過程の模刻および三つ足香炉を模刻する教育を受けた。三つ足香炉制作に用いる地金制作の体験は、鍛金家として自らの表現になくはならない金属のさまざまな魅力に気付かせるものであった。湯床吹きに続く、鋸打ち、打ち延べ、山おろしの工程では、金属を叩く行為に深く精通する者にしか見出せない表現の仕方を学んだ。さらに、模刻による三つ足香炉の制作では、見本を再現するための技法と造形だけでなく、見本から学ぶ姿勢を同時に習得することができた。さらに、模刻教育を受けた後の筆者の作品とその制作過程を分析していくと、まず、地金の性質を生かした作品を制作できたのは、模刻による制作で習得した技法によるものだということが分かった。その次の制作は、模刻教育で習得した技法と他の技法とを組み合わせ、新たな作品制作へとつながっている。そして、模刻教育で習得した技法と木目金を組み合わせた制作では、表現できる造形の幅の広さに気づき、模刻による制作の過程で発見した金属の歪みも、別の作品に生かすことができた。このように筆者が学んだ一連の模刻教育は、見本に近づけようと試行錯誤する中で、単に技法を覚えるだけでなく、技法を身体に「滲み込ま」せることによって、的確な形を手に入れることを容易にさせる。こうして身体に「滲み込ま」せた技法によって、学習者は、自らの表現の幅を広げ、その後の表現の自由を得ることができると言える。さらに模刻を制作の根本とすることによって、鍛金家にしか見出せない金属素材の魅力を含んだ表現を可能にし、金属の由緒を作家に「滲み込ま」せ制作の根本を育むだけでなく、作家の周囲のあらゆるものを見本と捉える姿勢を養うことができる。

以上、本論文では、これまで十分に捉えられてこなかった模刻教育の指導過程の実際を明らかにし、この教育方法の意味を捉え直した。本論文の考察から鍛金技法にとって模刻教育は、優れた作品を生み出す作家を育む教育方法として今日でも非常に重要であると指摘し、それを結論とした。

#### (博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、鍛金における模刻教育の具体的な指導過程を分析することによって、模刻という教育方法の有効性を明らかにしようとしたものである。その際、東京美術学校および東京芸術大学における鍛金教育の歴史的な展開と、そこでの教育の具体相に着目して論じたものである。文書史料の多くない鍛金分野における指導の実態に迫り、その意味を別掲しようとした意欲ある論文として評価できる。また、学生本人の模刻による学びや制作行為に即して論じたことで、文献からだけでは理解しにくい鍛金における模刻教育の姿を浮かび上がらせることができている。

第1章では、模刻とは何かを定義づけることがまず行われた。模刻は単に技法習得のために見本の通りつくることを意味するだけでなく、制作者の独自の表現を可能にすることまでを見越した教育方法であったのではないかという仮説が提示される。第2章では、東京美術学校における鍛金教育の具体的な

変遷を丁寧に跡づけることで、模刻教育の成立と展開、さらには衰退の意味が明らかにされる。東京美術学校の設立前後において、工芸は工業と美術の間で揺れ動いており、美術としての工芸を確立するために伝統技法の習得が重視されたことから、模刻という教育方法が体系化されたという立場に立って議論が進められる。東京美術学校の教員や学生の回顧録などから、模刻教育は、高度な伝統的鍛金技法の習得と同時に表現をも学ばせるものであることを見いだしている。また、昭和30年代半ばには模刻教育は、鍛金技法習得の中心的役割を終えるが、それは、鍛金作品の制作に工業機械を導入できるほど美術としての工芸が確立されたからだと分析している。第3章では、東京美術学校の模刻教育で用いられた「鍛金法順序手本」と「三つ足香炉」の教材としての有効性を論じている。それらの見本を見て学ぶことは、地金の特性や道具の扱いを学ぶだけでなく、学習者の造形感覚を鍛え、さらには鍛金制作工程における専門用語に精通し、鍛金の本質に迫らせる意味を持っていることを見いだした。このように模刻教育の意味を論理的に整理して捉え直すことによって、模刻教育の内実をなす特徴を現代の美術教育に生かす方途を探ることで論文は締めくくられている。

本論文は、以上のように本来見て学ぶという形、あるいは口伝という形で伝承されてきた鍛金における模刻教育が果たしてきた役割とその意義を整理して文章化したという意味で、今後の鍛金教育史に資する一つの基礎資料となり得るものと思われる。また、言葉になりにくい模刻教育の具体相を何とか言葉にしようと努力を重ねるなかで、本人は大きく成長した。その点からみても、課程博士論文として合格と判定した。

#### (作品審査結果の要旨)

審査の対象となった作品は、鍛金で作られた銅製の硫化仕上げを施した花器3点である。

作者は、提出作品の制作を計画するに当たり、修士課程では工芸作品として主に使えるモノとしての花器を多く制作してきたことから、絞り技法での花器の制作に取り組んだ。器の表面を植物の穂が群生する様子をデザインし、浮き彫りで表面全体を覆い尽くすように文様を配置構成している。審査の過程で作者自身のイメージを様々な試作を繰り返す中から独自の文様を創り出している点は評価できるとされた。

作品の形体は、絞り技法から生まれる独特の張りを感じさせ、大きなゆったりとした形体に、小さな花を生ける口を極端に小さくすることで、蕃蕪文の浮き彫りが有効に活かされており、ゆったりとした形体感のある作品に完成させている。

この作品は、絞り技法から生み出される張りのある形体に、蕃蕪文の図形を打ち出し、浮き彫りにするという技術的習得と計画性の上に成り立つものである。未完なところもあるが、一貫して時間のかかる地道な作業を積み重ねることに取り組み、博士課程における実技制作研究の成果として評価することができる。また、審査の過程において、この作品制作のプロセスを踏まえた上で、独自の世界観を有する作品であり、一見、作品上からはくみ取れない地道な手仕事の積み重ねを感じさせる力作として評価された。

審査結果として、博士課程での実技研究を通して、今後の作者自身の作品制作の新たな姿勢と課題を成果として導き出したこと、また、この作品は課程での作者の真摯な制作姿勢の上に成り立つものであり、制作研究の成果が十分に見ることのできる、独自の表現を有した存在感のある作品となっているとして評価し合格とした。

#### (総合審査結果の要旨)

ペルトネン純子君は、富山大学に教員として在籍しながら博士課程での研究に取り組んだ。

理論研究においては、その成果としての課程博士学位申請論文「模刻教育の意味についてー東京芸術大学鍛金教育の歴史を通してー」を執筆し提出した。

論文では、鍛金における模刻教育の具体的な指導過程を分析することによって、模刻という教育方法の有効性を明らかにしようとした。鍛金における模刻教育が果たしてきた役割とその意義を整理して文章化したという意味で、今後の鍛金教育史に資する一つの基礎資料となり得るものとし、また文書史料の多くない鍛金分野における指導の実態に迫り、その意味を別掲しようとした意欲ある論文として評価できるとされた。そして、見本を見て学ぶことは、地金の特性や道具の扱いを学ぶだけでなく、学習者の造形感覚を鍛え、さらには鍛金制作工程における専門用語に精通し、鍛金の本質に迫らせる意味を持っていることを見いだした。そして模刻教育の内実をなす特徴を現代の美術教育に生かす方途を探るということで、今後の研究の展開が期待できるとされた。

実技研究においては自らの専門である鍛金による制作研究に取り組んだ。そして博士審査展に、「土と天のあいだー銅鍛金蕃蕪文花器ー」と題した、絞り技法で制作された銅製の硫化仕上げを施した花器3点を提出展示した。器の表面を植物の穂が群生する様をデザインし、浮き彫りで表面全体を覆い尽くすように配置構成している。審査の過程で作者自身のイメージを様々な試作を繰り返す中から独自のデザインとして創り出している点が評価できるとされた。また、絞り技法から生まれる独特の張りのある形体で、大きな丸味を持つゆったりとした形体に、小さな花を生ける口を極端に小さくし、蕃蕪文の浮き彫りが有効に活かされた作品に完成させている。

審査の過程において、この作品制作のプロセスを踏まえた上で、独自の世界観を有する作品であり、一見作品上からはくみ取れない地道な手仕事の積み重ねを感じさせ、実技制作研究の成果が認められるとして評価できるとされた。

審査申請者は制作者であるとともに教育者である。提出された論文の内容は、筆者自身の教育の現場から生じた問題意識に基き、現職の教育者として真剣に取り組んだ課題であり、そしてまた、工芸家としての自らの工芸観を試すかのように花器の制作に取り組んだと言える。論文と作品それぞれの研究の成果物から今後の課題を見出すことができたことは大きな成果として評価できる。

総合審査結果として、理論研究、制作実技研究共に研究の成果が大いに認められる。論文、作品共に可能性のある質の高い優れた研究成果であると評価し総合的に合格とした。